

第3回 航空機運航のDX推進に向けた検討会 議事概要(案)

日時: 令和3年11月9日(火)13:30 ~ 15:20 Web 会議

<1.開会 交通管制部長挨拶>

今回の検討会は航空会社の皆様から取組を伺う機会。実際の運航におけるペーパーレス化やデジタル化への課題、そして航空機の運航中におけるデジタルデータ活用への期待などを伺い、前回同様活発な議論をお願いしたい。

<2.議事>

①検討の進め方

資料1を事務局から説明

②デジタル情報を活用した航空機運航の効率化促進に関する取組

資料3を日本航空株式会社から、資料4を全日本空輸株式会社から説明

- ANA から最後にご説明いただいた運航手続きに関しては皆さんと同じ方向に向いているという認識。私共として何ができるか実情を踏まえて整理しながら、検討を進めていきたい。
- 安全に関する気象情報はエアライン間で既に共有されていると伺っているが、そういった情報共有は今後もこのままの方法でなされるのか、あるいは、航空局のシステムを経由することを想定されているのか。この検討会の検討対象の観点で教えていただきたい。
⇒ 本検討会の対象は、航空局の SWIM のスキームから提供される情報について、まず取り組もうと考えている。事業者が持つ情報は次のステップとして前向きに連携したい。
- NOTOC (Notification IO Captain) は、パイロットが緊急事態時にすぐに参照することができるよう書面であることが国際基準の中で求められている。EFB (Electronic Flight Bag) だと、故障した場合の懸念等があるためである。ただし、国際会議で電子化も提案されており、今後は電子化が許容されていくかもしれない。
⇒ 安全の担保を前提に検討いただきたい。
- JAL の発表でイレギュラリティ時の他社便への振り替えにあたり他社の空席情報を共有できるとよいという話だったが、現状リアルタイムに情報共有できていないのか？ 理由を補足頂けると大変ありがたい。関連として、イレギュラリティ時の乗客へのフォローはどうなっているか。
ANA の発表に関連し、到着時刻の予測について管制と空港とエアラインの持つ情報が入り組んでいてどこにボトルネックがあるのか。正確な情報を得るには航空局から単純に情報をもらえればよいというものだけではないということの確認をしたい。
⇒ イレギュラリティについて、空港ごとに専用ダイヤルを使って直接運航者間で情報のやり

- 取りをしている。一般公開できない内容もあるが、運航者間で共有してお互い助け合う領域を見出して、業界としてよりよい方向をめざしていきたい。
- ⇒ イレギュラリティについて、例えば羽田の最終便がかなり遅れてしまった場合、極力お客様がご自宅に帰れるよう手配はしている。到着時刻の予測は、管制側がどういったロジックで到着予定時刻を割り出しているのか分からない。ギャップがあるのであればそれを埋めていくことも必要だと思う。
 - ⇒ 到着時刻の予測は、航空局もフライトプランをもとにして算出している。正確な予測のためには実際の飛行高度やスピードのリアルタイムの情報はとても重要な情報。将来的には機上からのリアルタイム情報を活用し精度を上げたい。また、ATFM では全体の交通量と、滑走路のキャパシティを確認し、交通量とのバランスで各航空機に優先順位を割り振り、その順番に応じて到着予定時刻が決まってくる。これらは航空局が持つ情報となるが、そうした情報を今後提供していくことは検討課題の一つ。
- ターミナルビルでもイレギュラー時は大変混乱する。到着ロビーで二次交通をクラウド化したようなプラットフォームがきちんと構築されると、関係者が同じ情報を持ってどなたにも正しい案内ができるし、更にはお客様ご自身でシームレスにその情報にアクセスできるのではないか。
 - ⇒ 航空局としても、実証実験など、何か背中を押す施策の検討をお願いしたい。
 - AODB(Airport Operational Database)は海外の空港でも導入されているが、個々の空港でそういうシステムが立ち上がる度に航空会社が何か特別な対応をする必要があるのか、それとも何か標準のデータのやり取りをするプロトコルのようなものが決められているのか。
 - ⇒ 空港ごとにシステムが出来るのであれば、航空会社もそれに依拠して用意しなければならぬだろう。一元化されたプラットフォームが用意されればシステムの開発とか準備が効率的に進められると思う。
 - 航空会社の運航乗務員や整備士がタブレットを使用してコミュニケーションを取っていると思うが、外部とのインターフェースはあるのか。
 - ⇒ 外部との接続は行っておらず、社内でのコミュニケーションツールである。
 - データ連携について考え方を簡単に共有させていただきたい。平成 29 年 4 月に「IoT 推進コンソーシアム」の中で、プラットフォームの連携を実現するための手法というのがまとめてある。ポイントは、大きく二つ。データカタログの整備というところと、カタログ用 API の整備というところ。この考えは、今回 SWIM で取り組もうとしているところと実は同じ。細かいところは別途説明する。
 - ⇒ API というインターフェースが重要で、データカタログでデータを合わせていけば全てが連携していく。どこでこの API を切っていくのかがデザインになっていると思う。API を使うと、データのやり取りが非常にスムーズにできるようになるので、現場の業務プロセスを考慮しつつベンダーの方々と一緒になって検討できないか。

③今後の進め方について

資料2を事務局から説明

- 意見聴取を行う予定なので、今日ご参加の皆さま方、是非前広に、色々なご意見等いただきたい。

<3.閉会 森川座長>

次回は情報提供サービスの方々の発表になります。別の観点から皆様方と色々な意見交換をさせていただきたいと思います。

以上